

| | |
|--------------|---|
| Title | 高齢者の次世代に対する利他的行動に関する研究 |
| Author(s) | 田淵, 恵 |
| Citation | 大阪大学, 2012, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/59341 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。 |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

| | |
|------------|--|
| 氏名 | 田 淵 恵 |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士(人間科学) |
| 学位記番号 | 第 25299 号 |
| 学位授与年月日 | 平成24年3月22日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻 |
| 学位論文名 | 高齢者の次世代に対する利他的行動に関する研究 |
| 論文審査委員 | (主査) 教授 佐藤 眞一 (副査) 教授 中道 正之 准教授 榎藤 恭之 |

論文内容の要旨

第1章では、「なぜ、高齢者が若い人を助けたいと感じ、行動するのか」という本論全体の問題提起を行い、適応論的観点および心理学的観点という2側面からのアプローチについて述べた。適応論的観点では、利他的行動が結果的に行為者の遺伝子を残すという利益につながるという考え方に立脚し、高齢女性が閉経後も若年の母親や子どもを助けるという現象を説明している(祖母仮説)。しかし適応論的観点のみでは、例えば高齢者の血縁のない次世代に対する利他的行動を説明することはできない。そこで本論では、高齢者の次世代に対する利他的行動を説明する心理学的なモデルを提唱することを目的とした。

第2章 高齢者の次世代に対する利他的行動と内的ワーキングモデル理論

第2章では、利他的行動の生起要因を説明する有力な一理論である、内的ワーキングモデル理論を取り上げた。これは、幼児期において養育者と安定的な関係を築いている者は、自己・他者について信頼性の高い認知的枠組みを形成するため、利他的行動が生じやすいとする理論である。研究1では、これまで主に青年期前期までの対象者において適用されてきたこの理論をそのまま高齢者に当てはめることを試みたが、モデルの検証の結果、高齢者の次世代に対する利他的行動を説明することはできなかった。

第3章 高齢者の次世代に対する利他的行動と世代性

第3章では、前章で用いた内的ワーキングモデル理論のみでは本論の問いを明らかにすることができなかったことから、モデルの再構築および再検証を目指した。研究2は、地域における子育て支援という利他的行動を行っている高齢者を対象に質的研究を行い、対象者の発言から利他的行動の背景要因について探ることを目的とした。その結果、特に支援の中心的メンバーとして活動している対象者において、Eriksonの提唱する世代性の概念と類似する発言が認められた。そこで研究3では研究1の理論モデルに世代性という要因を加え、モデルの検証を行った。その結果、高齢者の次世代に対する利他的行動意欲と世代性との有意な関係性が認められた。

第4章 世代性の概念整理と尺度作成

第4章では、世代性について概念整理を行うとともに、わが国における世代性尺度、そして短縮版世代性尺度を作成することを目的とした。欧米研究ではMcAdams & Aubin(1992)による概念整理と尺度作成により、統一的な概念が定められており、尺度を用いた実証的研究も蓄積されつつある。一方、わが国においては未だ概念についての議論も十分になされておらず、統一的に用いられる尺度がないために、実証的研究は非常に少ない。特に高齢者を対象とした研究はほとんどなされていないが、この理由としてわが国における世代性尺度の項目数が多く表現が冗長であるため、高齢の対象者に対して使用が困難であることが挙げられた。そこで研究4および研究5において、McAdams & Aubin(1992)の作成した「Loyola Generativity Scale」の尺度構成に沿った短縮版尺度を作成した。作成した尺度は5項目であり、尺度得点と心理的Well-beingとの関係、および利他的行動指標との関係性も明らかになり、一定以上の信頼性および妥当性が示された。

第5章 高齢者の世代性と若年者からのフィードバック

第5章では、高齢者の次世代に対する利他的行動を若年者との相互作用の中で捉える視点へと移った。世代性の発達、およびそれに伴う継続的な利他的行動には若年者からポジティブなフィードバックを受けることが重要であるという先行研究を基に、第5章では2つの仮説を立てた。第一仮説は、世代性の向上および次世代に対する利他的行動と心理的Well-beingの間を、若年者からのフィードバックが媒介するという仮説である。第二仮説は、若年者からのポジティブなフィードバックがなければ世代性は発達せず、次世代に対する利他的行動も継続しないという仮説である。なお、本章では心理的Well-beingの指標を、感情のポジティブ・ネガティブ両側面から測定する感情的Well-being尺度に統一している。研究6では、第一仮説に基づいたモデルの検討を行った。その結果、ネガティブWell-beingにおいてのみ、若年者からのフィードバックが媒介するという仮説に沿った結果となった。これは、研究6において用いた若年者からのフィードバック尺度の項目内容がネガティブなものに偏っていたためであると考えられたため、研究7では若年者からのポジティブ・フィードバック尺度を作成するための質的研究を行った。研究7の結果から作成した尺度を用い、研究8では再度、第一仮説に基づいたモデルの検討を行ったが、ポジティブ・フィードバックは、世代性の向上および次世代に対する利他的行動と心理的Well-beingとの間の媒介要因としては働かないという結果となった。研究9では、第一仮説および第二仮説について、短期パネルデータを用いて変数の因果関係を明らかにした。モデル検証の結果、第一仮説については、ネガティブ・フィードバックがネガティブWell-beingに影響しており、世代性および利他的行動との媒介要因であることが認められた。第二仮説については、ポジティブ・フィードバック、ネガティブ・フィードバックともに、継続的な世代性の向上と次世代に対する利他的行動への影響が認められた。研究10ではこの理論モデルを実践に移すことを目指し、地域の子育て支援を行っている高齢者メンバーを対象に、活動プログラムの中に若年者からのポジティブなフィードバックが直接的に受け取れる仕組みを取り入れることで、対象メンバーの支援行動の継続を調べた。その結果、月毎のメンバーの活動参加率は介入前よりも上昇していたが、1年間という短期間の介入であったため、介入前後でのメンバーの活動定着率には顕著な変動はなく、さらに継続的な介入が必要であるという課題が残った。

第6章 総合論議

本論に記載した10の研究を通して、高齢者の次世代に対する利他的行動の背景には、「次世代を導くことへの関心の向上」という高齢期特有の心理的発達があることが分かった。しかし、次世代への利他的行動は、高齢者がその心理的発達を背景に一方的に行い続けるというものではなく、若年者から受け取る肯定的な反応によって継続、あるいは否定的な反応によって断絶するものであることも同時に明らかとなった。こうした、他者に肯定の意を表す笑顔や言葉は、人間特有のものであると言われる。高齢者の次世代に対する利他的行動の背景には、人間特有の方法における社会的な相互作用により達成される、高齢者の心理的発達があることが、本論により導き出される結論である。

論文審査の結果の要旨

長寿化とともに、退職後あるいは子育て後に残された人生の時間はさらに伸長した。一方で、高齢者人口の増加によって、若年世代と高齢世代の関係性の在り方が社会的課題となっている。従来、高齢者は支援される存在とされていたが、最近の多くの社会老年学研究の成果からは、社会貢献への欲求を持つ高齢者の多いことが明らかになっている。高齢社会とは、高齢者が社会的資源として価値ある存在として位置づけられる社会でもある。

本研究は、子孫を残すという生物としての使命を終えた後の時期が特異的に長い人類の謎から研究の問いを発し、次世代への利他的行動への心理学的理論として内的ワーキングモデルの有効性に対する批判的検討を経て、「子育て支援」を次世代への利他的行動の事例として取り上げ、最終的に世代継承性の概念に到達し、しかも若年世代からのフィードバック機構を備えたメカニズムとしてそれを実証した研究である。

本論文は全6章から構成されており、第1章では閉経後の高齢女性の子育て支援が人類の長寿化の理由と考える祖母仮説では、広範な意味での次世代支援を説明するには不十分との考えに立脚して、心理学的理論の可能性を探索している。

第2章では、利他的行動の生起要因として有力な理論と考えられている内的ワーキングモデルを高齢者の次世代への利他的行動に当てはめて検討したが、その結果、その有効性を見出すことができなかった。

そこで、第3章では、次世代への利他的行動の事例として、地域における子育て支援活動を取り上げ、高齢者の利他的行動の背景にある動機を検討したところ、Erikson, E.H.による世代性の概念の有効性が予想できた。

第4章では、世代性概念の歴史的発展過程を検討し、McAdams & Aubin (1992)による世代性尺度の短縮版を作成して、心理的well-beingおよび利他的行動指標との関係性が明らかにした。

第5章では、世代間交流という観点から、高齢者世代と子育て中の若年世代の相互作用に焦点を当て、若年世代からのフィードバックが利他的行動と心理的well-beingにどのように関連するかについて3種類の研究を実施した。その過程で行った指標やモデルの修正を経て、ポジティブ・フィードバックとネガティブ・フィードバックの役割を明確にした上で、実際の子育て支援プログラムにこのフィードバックの方法を取り入れて、参加メンバーの支援活動の継続過程を、1年をかけて縦断的に検討している。

第6章の総合論議では、本研究で実施された10種類に及ぶ研究の足跡をたどり、その結果、高齢期には次世代を導くことへの関心が発達することが明らかとなり、そして、そのためには、若い世代からのフィードバックという相互性の重要性を指摘している。

本研究は、高齢者の利他的行動の促進と抑制に関わる実証的な研究ではあるが、幼児期、成人期、高齢期という3世代を対象とした研究とみなすこともできる。その意味では、生涯発達心理学の実証的かつ実践的研究として捉え直すことでさらなる発展が期待できる。また、本論文には、まさに研究者としての著者の発達過程とその成果が十分に反映されており、今後の発展の可能性を予感させる成果であると評価された。以上より、本論文は、博士（人間科学）の学位授与に値するものと判定された。